
がっこがっこ

ちり紙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
がっこがっこ

【Nコード】
N6294H

【作者名】
ちり紙

【あらすじ】
見習い魔法使いシードの冒険記です。

第1章：魔法学校

「はい、位置について」サフラン先生の掛け声と同時にみんな横一列で構えた。

「スタート」の掛け声と同時にみんな杖を両手で持ち呪文を唱える。「ファイア」・・・スピードにはらつきがあるが標的へ火球が飛んでいく・・・

中には飛んでいかない子が・・・「こら！シード！！真面目にしないさい」。

「はあゝい」とやる気がなさそうに答えるシード。

ここは見習い魔法使いが通う魔法学校である。

「あいつ、まーた怒られてるの」とクラスの子達が騒いでいた。

「みんな集まって」。このクラスではフェンネル君が一番上手ですね。」

「呪文を唱える速さそして正確さとも素晴らしいですね。」

「みなさんも見習って練習に励んでください。」サフラン先生はここに話していた。

が・・・「それと、シード君はこの後職員室へ来るように。」ここは低い声で話した。

「ちえ、また怒られるのか。もう慣れてるもんね。だ。」シードはふてくされながら

職員室へ入って行った。

「シード君、もう君も最上級クラスよ。来月からは卒業の試験もあるのよ？」

「どうしてもつと真面目にとりくまないの？」先生は大体想定内の事を言ってきた。

「みんなは卒業試験うけて卒業できたら色々活躍できるだろうから

いいよね。」

「僕には家族がないし卒業しても身寄りのない血統の悪い者なんかとだーれも

パーティー組んでくれないに決まってる」「もういいんだ!!」シードがなげやりに

答えるとサフラン先生は首を左右に振りながらいつもの答えを言うてきた。

「シード。君には何度もいつてるが君のお父さんは生きてるよ。生きてるどころか

魔法界ではトップクラスの魔法使いなんだよ。君がそんなになげやりじゃお父さん

帰ってきたときに悲しむよ。」サフラン先生はやさしく答えてきた。

「みんなそう言うが僕はあったこともないよ!! ねえ、先生どうしてなの?」

そこへアニス校長先生が話しかけてきた。（魔法界の四聖の一人である。）

「なんだ、シードはまだお父さんに会えてないのか。じゃあ今日の夜あわせてやろう」

この言葉を聞いてシードはビックリした。「ほ、ほんと? アニス校長先生」

「ああ、約束は守ろう。但し、今後は授業を真面目に受け卒業試験も真面目に受ける事」

「うん。アニス校長先生大丈夫、僕真面目になんだってやるよ。そのかわり絶対だよ。」

シードは喜んで家に帰って行った。

「校長そんな約束をして、シード君のお父さんの行方は分からないままじゃ・・・」

サフラン先生は心配そうに話した。

「いや、大丈夫だよ。あわせる事だけはできるんだ。私ならね。」

「ただいまー」と家へ入ったが「まあ誰もいるわけないか」とシードは

一人で部屋を掃除しだした。「お父さんが帰ってくる前に片づけな
いと」と

はりきって掃除をしているとドアをノックする音が聞こえた。

「誰？・・・と、父さん？」とシードは喜び勢いよく扉を開けた。

「きゃあ、もうあぶないなー」いたのは同じクラスのセージだった。

「はい。夕御飯のおすそ分けよ。」とセージは言いながらシードへ
料理を渡した。

シードは料理を受け取り「いつもありがとう」と言った後にはっと
気がついた。

「そ、そうだ。お父さんの分の料理も用意しないと。」

「え？シードのお父さん今日帰ってくるの？」

「うん校長先生がそういつてたんだ。」

「それじゃあお母さんに頼んでもう少し持ってくるよ。」

「ありがとー」シードはもうご機嫌だった。

シードは部屋の掃除に料理の準備もすませお父さんの帰りを

テーブルに座って待っていた。夜の7時を過ぎ・・・8時・・・9
時・・・

テーブルの上の料理はもう冷えていた。

「校長先生が帰ってくるっていったもん・・・。」シードは目に涙
をためまつた。

丁度10時を過ぎたころだった。

「コンコン」ドアをノックする音が聞こえた。

「だ、誰？父さん？」とシードは言いながらドアを開けた。

「夜分にすまないねシード君」立っていたのはアニス校長先生だっ
た。

「君との学校での約束の準備に時間がかかってね。」

「さあ、お父さんに会わせてあげるよ。ついておいで。」

アニス校長先生の後をシードはついて行った。

この街の丁度中心にある塔へ行くと、アニス校長先生は立ち止りシードの方へ向き直った。

「シード、これから見せる事については誰にも言ってはだめだよ。この約束は守ってくれ。」

「はい、アニス校長先生。お父さんに会えるんなら僕ちゃんと黙ってるよ。」

「じゃ、この杖を持って。」アニス校長先生はシードへ杖を渡した。
「せ、先生、杖は・・・魔法は学校内以外では街の中では使えないんじゃない?」

「この塔の中では使えるから・・・魔物がいるから一応君も持つていなさい。」

シードはアニス校長先生と塔の中へ入って行った。

昼間は塔の中は光が差し込みすごく明るい場所なのだが、夜中はうすぐらく怖い感じだった。

「アニス校長先生、お父さんはどこに?」シードはこの怖い感じを紛らわそうと話した。

「しっ、今から地下へ降りるからね。お父さんにはそこで会えるよ。」

アニス校長先生と地下へほとんど降りていき地下3階で地下のホールのような場所へでた。

「ぐるるるる・・・」魔物の声が聞こえた。

「せ、先生」シードはアニス校長先生の後ろへ逃げ込んだ。

「大丈夫。」アニス校長先生はそう言うのと杖を持ち「トランス」と唱えた。

すると前方にいたはずのアニス校長先生の姿が見えなくなった。そしてすぐに「トランス」と声がし、今度はアニス校長先生が見え

た。

「せ、先生怖かったよ。」シードは涙声になっていた。

「静かに、姿はけせるけど声は聞こえるからみつからないように行くよ。」

「ぐるるるる・・・」恐ろしい魔物の声が響く中ホールの最奥部にある扉まで進んだ。

「さあ、この扉の向こうに君のお父さんはいるよ。」アニス校長先生は周囲を警戒しながらもやさしくシードへ話しかけた。

「残念ながらお父さんに会えるのは君だけだ。会って色々話すといよ。」

「先生はここでまってるから」と言うとアニス校長先生は扉を開けた。

「せ、先生ありがと。」シードは勢いよく扉をくぐった。中は真つ暗闇だった。

「お父さん、どこ？」シードが声を掛けると、暗闇から声が聞こえた。

「やあ、シードよく来てくれたね。今日アニスから来ることを聞いていたよ」

「色々話したいところだがそう時間がなくてね。」

「シードすまないが今日はお父さんから色々話していいかい？」

「事情があつて突然いなくなるかもしれないがその時はその時」

「また時期が来れば会えるようになる。アニスに頼んでおいでくれ。」

「うん。うん。わかったよ父さん。」シードはもううれしくて涙ぐんでいた。

「まずはシード一人にして悪いな。お母さんはシードを生んだ時に・・・。」

「しかもお父さんときたら、その場所に立ち会えたのがほんの1日だったからな。」

「アニスから聞いたよ。来月魔法学校の卒業試験だってな。」

「試験がんばれ。無事卒業し、いい仲間巡り合え。」

「でも、お父さん。僕魔法の才能ないよ。僕だけ魔法が前に飛ばないんだ。」

「サフラン先生にいつも怒られてばっかでもうやんなっちゃう。」

「ははは、お前も俺と一緒に魔法が飛ばないのか。ははは、親子共々魔法学校では

苦勞するな。」

「いいか？魔法が飛ばないってことは魔法と同化しやすいってことだ。」

「逆にそれを利用すると色々使えるから実は有利なんだぞ」

「まあえらそうに言っても、実際それに気づいたのは仲間と旅を始めてからだけだな」

「シード。あまり長くは、話せないが今日のことは秘密にな。」

「それと、魔法についての相談はこの街ならキャラウェイに聞くといい。」

「お父さんの魔法について色々しているから。くれぐれもアニスには内緒な。」

「君が旅を始めれば、いずれ俺に会える方法も知ることになるだろう。。。」

「最後になるが、旅の仲間を集めるなら父さんの昔の仲間を尋ねてみてくれ。」

「きっと、いい仲間を紹介してくれるはずだ。」

「シード。父さんと母さんの宝物だよ。いつか実際に会えることを願って。じゃあな。」

その声を最後に父さんの声は聞こえなくなった。

「ぐすつ。お父さん？」シードは涙をぬぐいながら扉を開け部屋からでた。

「シード、お父さんに会えたかな。また会える時期がくれば声をかけよう。」

やさしくかたりかけるアニス校長先生と一緒にシードは塔をでた。

翌朝、シードは目を覚ますとすぐに身支度を整えお父さんの友達であるウキャラウェイを

探しに出かけた。シードはこの街でその人物に会ったことがないのだ。

お父さんをよく知っている人なんだろうな。

「シードおはよー」セージだった。

「やあセージおはよー。」

「お父さんに会えたの？」

「うん。まあ一応って感じかな？会えたよ」シードはにつこり笑って答えた。

「そうだ。ねえセージ、キャラウェイって人知らないかな？」

「キャラウェイ？知らないねー。探してるの？」

「うん。そっかー知らないかー。まあ色々聞いてみるよ。」

「うん。私もお母さんに聞いておくね」セージもシードが明るくなっているの

につこり笑顔で答えた。

この街で一番人の出入りがある酒場の前を歩いていると、ふいに声を掛けられた。

「お？シードじゃないか。どうした？」クラスメートのタデとタデのお父さんだった。

タデとは魔法学校での成績が近いので、お互い通じるものがあるのか仲が良かった。

「うん。キャラウェイって人探してるんだけど、見つかんなくて。」

「キャラウェイ？キャラウェイなら酒場に多分いるぞ？」タデのお父さんが教えてくれた。

「ほんと？ああ、でも僕だけじゃ酒場入れないな・・・」

「よし、じゃあおじさんが一緒に入ってやるよ。ほら、タデもつきあえ」

「おじさんありがとう。」

店に入ると中はいろんな人でにぎわっていた。

酒場というよりはなにかなんでも扱っているお店のような感じだった。

「ほら、あの角のテーブルに座っているのがキャラウェイだよ」

「気難しい女だから煙たがられたらあきらめろよ」そう言っているとタデのお父さんは

タデとそばのテーブルへ座って飲みものを頼んでいた。

「あの。キャラウェイさんですか？。」シードはドキドキしながら尋ねた。

「あら、私に用？子供から声掛けらるなんて珍しいこともあるもんね。」

「あの僕のお父さんの事で教えてほしくって。」

「はあ？あなたのお父さん？誰？」確かに気難しそうな人だと思った。

「あの・・・ラジカル。」

「ラジカル？・・・え・・・フェイクの子なの？あんたどうやってここ入ってきたの。」

キャラウェイは急にやさしい口調に変わった。

「昨日お父さんと話せて、ただお父さん時間なくてお父さんの魔法の事なら

キャラウェイに聞けっっていわれて、それで・・・でも名前はラジカルだよ？。」

「ははは、えらい子ね。フェイクの魔法か・・・確かに私以外意味分からない人おおいかも」

「簡単に言つと魔法はほとんど使わないのがフェイクの魔法なのよ。」

「そうだ。いいものあるからうちへいらっしやい。」そう言つてキヤラウェイは席を立つた。

シードもタデのお父さんへお辞儀をしあわててついて行つた。

キヤラウェイの家へはいると一つの水晶を見せてくれた。

「よく見てるのよ？フェイクの魔法がどういふのかよくわかるから。」

水晶の中にはあるパーティとの戦いの場面が映っていた。

「このお父さんの周りにいる人たちは？」

「ああ、フェイクの仲間達だよ。この国のそれぞれの街にいるはずだよ。」

「あれ・・・お父さん杖をもつてない！！。」

「ふふふ。フェイクは結構杖を持たないことがおおくてね。」

「パーティ同士の戦いの場合前衛の戦士同士の衝突による優劣」

「それと後衛の魔法使いが使う攻撃魔法が通常勝負を決めるんだね」

「見てて、敵の魔法使いが攻撃魔法をフェイクへ使うから」

「魔法学校ではならえないレベルのファイア系魔法が放たれた瞬間」

「あ、お父さん消えた。放たれたファイア系魔法も同時に消滅していた。」

「ふふ、フェイクの得意魔法の一つね。」

その後も色々な場面を説明してくれた。

わかったこととしては今まで魔法学校で習っていた魔法使いとは異質というのがよくわかった。

そして一本の杖を渡してくれた。

「これはあなたのお父さんの杖よ。帰ってきたら返す予定だったけ

ど。」

そういつて渡してくれた杖はありえないものだった。

「これが・・・杖？・・・これ・・・ただの大きなキノコじゃ・・・。」

「

「あはは、冗談じゃなくてほんとよ。あなたのお父さんは普段それを使ってるの。」

「まあだからフェイクなんて呼ばれてるのかもね。」

「彼の得意魔法は状態変化系になるわ。」

「え？そんな魔法・・・学校じゃ教えてもらえないけど・・・。」

「まあ学校じゃ学べないわね。色々旅を続ける中で手に入れるものだからね。」

「あ、でもあなた昨日お父さんに逢ったってことはあの塔の地下にいったんでしょ？」

「どうやら塔の秘密を知っている人のようだ。」

「うん。アニス校長先生が連れて行ってくれた。」

「ふふ、その時じゃあ、アニスなにか魔法使わなかった？」

「あ、消える魔法だったよ。あれもその状態変化系ってやつだね」

「その呪文覚えてる？」

「うん。もちろん。唱えてみようか？」

「ここじゃだめよ。普通に魔法が使えるのはこの街の中じゃ魔法学校くらいだから」

「それに魔法はただ唱えるだけじゃ使えないよ。ちゃんと契約しないと」

「ただ一つ言える事はその魔法だけはあなたは契約しなくても使えるから。」

「え・・・。なんで？」

「それは秘密でーす。っていうかあなたが状態変化系魔法使いだからだよ。」

「そいえば魔法学校で習う魔法って対象へ飛ばす魔法でしょ？」

「うん。でも僕飛ばせないんだ……。でも、来月卒業試験で……。」

「あはは、そこまでフェイクと一緒になんだ。こりゃすごいや。」

「いい？消えた対象物へは魔法は飛ばせない。」

「うん。あ、そうか。」

「でもね、相手に魔法を使わせてから消えればもっと効果有」

その後も色々お父さんの話をしてくれた。

「色々ありがとうキャラウェイさん。僕もがんばってお父さんみたいにになる!!」

「ふふふ、その意気よ。まあまずは来月あるっていう卒業試験がんばりなさい。」

「では、今から卒業試験を始めます。」サフラン先生は明るく話した。

「まずみんな3人ずつパーティを組んでください。」

「組んだら各パーティそれぞれリーダーを決めて、この箱の中からくじを引いてください。」

「同じ番号くじ同士で対戦をしてもらいます。」

「えー。先生それあぶないよ。」

「みなさんの魔法ならまだ大けがすることはないし、そばに治癒の魔法を使える方達を」

呼んでおりますので、すぐに治療しますから安心してください。」

「と言っても、気をつけないと危険ですのでふざけないこと。」

「それとこの試合で勝ったパーティを合格とするわけではありませんせん。」

「対戦中の各個人の能力をそれぞれ見ながら判断します。」

「では、みんなまずはパーティを組んでください。」

みんな一斉にパーティを組み始めた。

いつも成績が悪い僕に声がかかるわけないか……とシードが落ち込み始めた時。

「シードーこつちおいでー」セージが声を掛けてくれた。

「いいの？セージ」

「おいでおいで〜。」

「ありがとー。」シードはにこにこ顔でセージとパーティを組むことにした。

セージはあの日の後シードが一人特訓していたのを知っていたのだ。
「あと一人誰かいないかなー。」セージが周囲を見回していると
やはりシードと同じくあまり成績のよくないタデが落ち込みポツンと突っ立っていた。

既に泣きそうな感じを漂わせていた。

「あ、タデがいるよ。タデにお願いしようよ。」シードはセージに頼み込んだ。

「タデー、おいでおいでー」セージが声を掛けると

「しょ、しょうがないなー」タデは嬉しそうにやってきた。

「よーし3人そろった。リーダーは誰がする？」

「もちろんシードだよ」セージはにっこり答えた。

「おおシード頼むぜ」タデも納得した。

「2人共僕の成績しってるくせに・・・それじゃ、くじ引いてくるね」

「2番だったよー」

「おー早めなのかな？1番よりはいいよね」

「はい。みなさんくじを引きましたね。」

「では、さっそく試験をはじめます。」

「よばれた番号のパーティはおくの広場にいつてください。」

「1番の2組私といっしょについてきてください。みんなは休憩な
り作戦なり考えてね」

・・・・・・

広場からは対戦中の感じが伝わってきた。

・・・

「うう次にもう対戦かゝ怖いねー」タデがいうと

「横一列に3人ならぶのかな？」と、セージは対戦の事を話した。

「うーんどうだろうね。まあ僕らは横一列だと勝つのむずかしいや。」

「だって僕の魔法前に飛ばないから・・・」シードがくやしそうに言ってから

「僕たちは相手がどうあれ僕が中央で前に一步出しておくから」

「二人ははじめは僕の後ろに立って、相手の攻撃にあわせて両脇一歩前にでて

正面の相手へ攻撃してね。」

「ええ、それじゃシードが集中で攻撃受けちゃうよ」と二人が声をそろえた。

シードはにつこり笑うと「大丈夫だよ。それにもし僕がよけるの失敗しても、

相手が減ってる可能性も高いでしょ？」

「どうせなら勝つ可能性が高いほうでいこうよ。」

いままでのやるきのないシードとは思えない発言だった。

「う、うんわかった。」二人はシードの意見にしたがった。

奥の広場からサフラン先生がやってきた。

「はい次は2番の2組私といっしょについてきてください。1番目の組は互角でしたよ。」

立ち上がるシード達の前に別の立ち上がるパーティーがいた。

「あ、テルペン達のパーティーだ」タデが少しうつむいた。

「どうしたの？タデ？」とシードが聞くと

「あの3人となりのクラスの成績結構いいやつらだよ。俺よりぜんぜん魔法強いや・・・」

とタデが弱い声で答えた。

「なーんだそんなことか。さっきの陣形でやれば強さはタデの方が

上になるよ。」

「普段の成績なんか気にせずがんばろうよ」シードはつとめて明るく話した。

奥の広場には先生達が観戦に来ていた。アニス校長先生もいた。

「では今から対戦始めます。両パーティ構えて」

相手は横に3人並んだ。

こちらは縦に3人並んだ。

会場が少しざわついた。

「縦3人って何考えてんだ？」テルペン達がつぶやいた時サフラン先生の号令がなった。

相手全員が杖を両手で持ちいつでも魔法を唱えられるよう構えた時だった。

シードが持っていた杖を中央のテルペンへ投げつけた。

予想外の事で相手の動きが一瞬ぶれ・・・相手3人ともが唱え始めた。

「ファイア」テルペン達3人は一斉に先頭のシードめがけて攻撃をしかけた。

「ゴオツ」とテルペンの放った火球で杖が焼け落ちた。

それとほぼ同時だった。

「トランス」というシードの声やしードの姿が突然消えた。

目の前のシードがいなくなり「うあ」とタデが一瞬声をあげたが、打ち合わせ通りに脇に飛び出し一歩前にでると、正面の相手めがけて魔法を唱えていた。

セージも同様に動きを合わせた。

「ファイア」二人の火球は正面に飛んで行った。

「ゴオツ」「うああつ」「ぐああつ」相手パーティ2人は吹っ飛び、一瞬でテルペン

一人になっていた。

「くそつどうなってんだ」テルペンが杖を構え次の魔法を唱えようとしたときだった。

「ファイア」と叫ぶシードの声とともに「ゴオツ」と火球がテルペンに当たった。

「ぐあつ」テルペンが倒れた側にシードが現れた。

「はい。それまで」とサフラン先生が止めに入った。

「やったあ、すごい勝てたよ。俺の魔法つえー」タデが喜びとび跳ねた。

セージとシードはほつとした表情で目を合わせるとにこつとお互い笑っていた。

「シード君達パーティは横の広場へ。テルペン君達は治療を受けたら元の広場へ戻ってください。」

「すごいすごい。テルペン達は強いパーティなのに勝っちゃったよ。タデは興奮していた。」

「ほんと、シードが消えた時びっくりしたよ。あれはなに？魔法？」

「うん。魔法だよ。お父さんが得意としてた魔法なんだって。」

「こないだ酒場で話してたキャラウェイさんが教えてくれたんだ。」

「すっげー。うわー。これで俺達合格なのかな？」

3人共うれしそうに横の広場へいくとそこには既に1番組で勝ったパーティが休憩していた。

「やあ、君たちも合格おめでとう。」不意にそのパーティの子が言ってきた。

「ええ？合格なの？」3人共びつくりして聞き返した。

「サフラン先生がこの広場に夕方までに入った子達は合格っていつたからおめでとう」

「やったあー」。3人はびよんびよん跳びはねて喜んだ。

その後も広場へ入って来る子達は喜びあっていた。

夕方が近づいたころアニス校長先生が広場へやってきた。

「みなさん、今日はよくがんばったね。ここにいる子達は魔法学校卒業です。」

「明日からはそれぞれ目指すものへ向けてがんばってください。」
「これは君たちが正式に魔法学校を卒業していることを証明する指輪です。」

「当面は卒業したといってもまだまだ見習い期間中ですので、くれぐれも無茶をしない事」

「では、卒業おめでとう」アニス先生はそう言つとシードへにこつと微笑んだ。

シードもにっこり微笑みセージとタデと3人で学校の校門へでた。

校門の周囲では生徒達の両親がまっていた。

無事卒業できた子、卒業できずに別の道へ進む子それぞれだが両親はやさしく迎えていた。

セージの両親も立っていた。

「セージ」両親がセージへ声を掛けると

セージは笑いながら指輪を見せた。

「おめでとう」両親はやさしく少しほつとしたようにセージをなでた。

「タデー」タデのお父さんお母さんも迎えに来ていた。

「かあちゃん」タデは泣きながら2人の元へ走って行った。

「何も言つな何も言つなよくがんばったな。明日からは一緒に畑を耕そう。」

農業はいいぞー。「両親は既に決めつけていたようだった・・・。」

「ちよ・・・、俺受かったよー!!」

「わかつてるわかつてる。大根を育てるのは楽・・・え?」

「ほら、この指輪みてみてきれいでしょ」とタデは指輪を見せた。
.....

「おお息子よく信じてたぞー!」。「タデのお父さんは号泣していた。」

シードはその様子を少しうらやましそうに笑って見ながら家路についた。

第2章：初仕事

魔法学校卒業翌日セージがシードの家へやってきた。

「シード、ねね、今からいろんな魔法を探しにいかない？」

「へ？それってどうやるの？」

「昨日お父さんが教えてくれたんだけど、酒場にいったって募集している仕事をこなせば

報酬として魔法の契約をさせてくれるんだって。お金もくれるらしいよ。」

「おお！！したいしたい！！でも、見習い同然の僕らでできるかな？」

「協力してやればきつとできるよ。無理だったらキャンセルでいいらしいから。」

「よし、いってみよ。」

シード達はさっそく酒場へ向かった。

今までは親同伴でしか入れなかった酒場だが魔法学校卒業の証である指輪をつけていれば入店することができた。

店内は今日も賑わっていた。

「あら？シードじゃない」 キャラウェイが声を掛けてくれた。

「あ、キャラウェイさんこんにちは、見て見て僕試験合格したよ。」

シードはにつこり笑いながら指輪をキャラウェイへ見せた。

「ふふふ、おめでとう。今日は何をしに酒場へ？」

「うん、今日はこっちのセージと一緒に使える魔法増やそうと思つて。」

「ああ、仕事受けに来たのね。」 そついうとキャラウェイは2人を見てしばし考えた。

「初めからあまり厳しい仕事を受けるんじゃないよ？それと無理だったらキャンセル。」

「うん。」「はい」2人は元気よく返事をした。

「何か不安ね・・・。仕事募集の掲示板は店の出入り口横に立ってるわよ。」

「掲示板が3つあると思うけど左から右へ難易度わけしてあるのよ。」

「難易度が高いほうが当然報酬もいってわけだね。」

「報酬に関しては仕事事に書いてあるから、ほしいものが確認してから受けるといいわ」

「うん、わかった。ありがとう。」2人はそう言つと掲示板まで行き仕事を探しだした。

・・・・・・

一番左の掲示板は魔物収集系、真ん中の掲示板は商品の配達、右の掲示板は討伐・退治に主に分かれていた。

「うん。いっぱいあるね。」シードがそう言つて悩んでいると横のセージが目を輝かせて

「シード！！これ見て」といい、真ん中の掲示板のある仕事を指した。

「となり街のムスムリへ商品のお届け。」依頼者：武器屋カルダモン
報酬：魔法契約（火・水・土のどれか一つの1v2）

「おお、これほしいね・・・でも、マムルークいったことないよ？。」

「

「地図ならもってるわ。2人でいけば大丈夫よ。」
そついうと2人はさっそくその仕事を受けにいった。

依頼品を受け取り、マムルークへ出発しようとした時だった。

「セージ？」声を掛けて来たのはセージの友達のアリミノだった。
杖を持ち出かけるように見えた。

「アリミノゝあれ？アリミノも街でるの？」

「セージ達も？どこいくの？」

「うん。これからシードと、マムルークまで仕事で出かけるの。」

「マムルーク！ーやった私も一緒だよ。よかつたら一緒いかない？。」

「

「わあ、んじゃ一緒行こう。いいよね？シード。」シードはにっこりうなずいた。

こうして3人のパーティとしてマムルークへ向け出発した。

・・・

地図をみると、マムルークへは森を2つ抜けた先の山のふもとに位置していた。

街をでた最初の森を進んでいると

「ファ・ファイア」と声が聞こえてきた。

「あれってタデの声のような。」シードがつぶやくと間もなく

タデが魔物に追われながら魔法を唱えていたのが見えた。

「あぶないよ助けよう。」セージはそう言う杖を構えた。

「あれ？でも、あれって・・・ぴょんぴょん飛んでるけど魔物？」シ

ードが戸惑っていると

「あれは魔物と言ってもただのスライムよ。あいつ何やってるのかしら。」とアリミノが言い

「アクア」と素早く唱えた。

「ボシュツ」水球がタデを襲うスライムへ命中した。

やつつけたというよりは地面へ解けた感じだった。

「あ、あ・・・」とタデは尻もちをつきながら周囲を見回しシード達3人を見つけた。

「シードゝゝ助かったよありがとー。」

タデはかなり逃げ回ったのかドロドロになっていた。

「タデ君、君ねスライムはかなり低いレベルの魔物よ？何やってんのよ。」

「あれにファイアなんか効果低いよ。もう、一人で森はまだ早いん

じゃない？」

アリミノが冷たく問い詰めた。

「うっ、アリミノか・・・お前もいたのか・・・相変わらずきつい奴だな

まあ助かったよ、ありがと。」タデはバツが悪そうだった。

「ところでみんなどこ行ってるの？」

「僕達マムルークへ向かっているんだよ。僕とセージはお使いの仕事。」

「私は、マムルークへ仲間探しに向かうとこ。」アリミノが答えると「おお、あのさこの森抜けた次の森にハーピーがいるんだけど、ついででいいから

見かけたら羽を取るの手伝ってくれない？」タデがそう言うときアリミノはおでこに手をあて呆れた顔をした。

「あんたね・・・魔法使いがどうやって羽集めるのよ？」

「そういう収集する時は前衛できる仲間と一緒にしないと・・・。」

「うう、やっぱりそうなのか・・・。実はさっきから失敗してて、スライムで練習しようとしたら、スライムに怒られちゃって・・・、へへ」タデは頭をかきながら答えた。

「ま、まあここで会ったのもなにかの縁だし、とりあえず次の森まで一緒行く？」

「うあ、ありがと」タデがパーティに加わった。

「魔法使い4人のパーティってありえないんですけど」とアリミノが呆れていた。

「4人だと目立つからハーピー出てきそうだねー。」

「まあ出てきても羽取る方法はないよ。攻撃受ける前にみんなでもつつけちゃお」

タデはあきらめきれないのかしゅんとしながらもついてきていた。

その後一つ目の森を順調に進み、2つ目の森に入ってすぐの時だった。

ハーピーが木の下でえさを食べていた。

「あ、ハーピーだよ。ほらあれ。まだこっち気づいてない。」

タデが目を輝かせてみんなに話しかけた。

「だーからー。羽を取る方法ないんだからしょうがないでしょ。」
とアリミノが言う

「あれ？なんかあのハーピーすごくいろんなところ焦げてない？」と
セージが言った。

「実は何回かあのハーピーにチャレンジしたんだけどだめでねー。」

「なんてひどい奴だ・・・。」とアリミノが呆れた時だった。

「あの・・・ちゃんと援護してくれるのなら取ってこよっか？」
とシードが言った。

「おお、シードくまってました。ありがとー！頼むよー」タデは
とびはねて喜んだ。

「ちえ、やっぱりタデそのつもりだったのか。みんな援護してね。」
と言う

一人ハーピーの方へ向かった。

「あ、ちょっと」とアリミノが止めようとしたが
セージが「シードなら大丈夫だよ。」と止めるのを遮った。

「どうやって羽取る気よ。絶対無理よ。」アリミノが呆れながら援
護の為杖を構えると

シードは「トランス」と唱えた。

「・・・消えた・・・」アリミノがびっくりしていると。

「シードが羽取ったらみんなで援護ね。」とセージが声を掛けた。
しばらくするとハーピーの片方の羽が引っ張られているのがわかつ
た・・・が

全然抜けてないのが見えた。

というかハーピーが片方の羽を引っ張られ怒りだしてしまった。

「うあ、シードあぶないかな。」タデがそう言った時だった。

「ファイア」とシードの声がし、ハーピーの体が少し横へ跳んだ。

「ブチブチッ」とハーピーの羽が取れる音がし、途端にハーピーが周囲を攻撃しはじめた。

「いまだ。」

「ファイア」3人同時に唱えていた。

「キエー」ハーピーは甲高い声を上げながら森の奥へ逃げて行った。

「はあはあ、やったねー。」シードは羽を握りしめみんなのところへ戻ってきた。

シードの握りしめた羽を見て「ちょ・・・それは・・・羽取りすぎだよ。」と3人はあきれた。

「だって、みんないるだろうと思って。はい1本づつね。」

そう言うみんなに羽を一本づつ渡した。

「ねえ、さっきのあの魔法なに？」アリミノが興味深々に聞いてきた。

「あれは、トランスって魔法で消える魔法だよ。ただね、ほんとに消えるだけだよ。」

「その魔法いいなー。私も覚えたい。どこで覚えられるの？」

「えっとね。旅してたら手に入れられるってお父さんが言ってた。

それ以上はよくわかんない。」

「う。あんたはなんでわかんないのに使えるのよ。」アリミノが聞くと

「うん。なんでもこの魔法だけ僕は契約しなくても使えるんだって教えてくれたの。」

「うーん。いいなー」アリミノがそうつぶやくと

「そうかなー。僕はみんなみたいに魔法を飛ばせるのにあこがれるけどなー。」と

シードもつぶやいた。

その横でタデは羽を持ちはしゃいでいた。

「あ、タデはこの後どうするの？」

「うん？さっそく街に帰ってこの羽渡して報酬もらってくるよ。」

「へー、ところで報酬は何なの？」

「装備品だよねんなのがあったからみんなも街帰ったらその仕事受けるといいよ」

「んじゃ、みんなありがとね。さっそく帰りまーす。」

「じゃあ、タデ気をつけて帰りなよー。」

シード達はまた、3人のパーティになり森の奥へ進んでいった。

第3章：マムルーク

タデと別れた後シード達3人は2つ目の森の中ほどまで来ていた。

「気をつけてね。シードとセージはこの森来た事ないんだろうけど、ここは結構大きな

魔物でてくるから。」

「え？アリミノ来たことあるの？すごい」セージが関心しているとガサツガサツと前方の木が揺れた。

「ぐああああ」叫び声をあげながら出て来たのは熊だった。

「うわっ、ちよっとこんなの私たちじゃ倒せないよ。」アリミノがあわてていると

熊がいつきにこちらへ突進してきた。

「いったんみんなばらけよう」シードの声に合わせ3人は3方に飛んだ。

熊を囲むように3人散らばると熊は中央で3人をにらんでいた。

「アリミノ・・・戦って勝てるものかな？」

「無理無理熊の一撃に私達耐えられるほど頑丈じゃないでしょ。」

「よし。それじゃ逃げよう。僕がおとりになるからセージとアリミノ先に森の奥へ進んで。」

そういうとシードは一気に熊めがけて飛びかかった。

「あぶない。」アリミノはそういうと熊めがけて「アクア」と唱えた。

熊はシードに目標を定め攻撃を仕掛けようとした時だった。

「トランス」とシードは唱え姿をけした。

目標を見失った熊が棒立ちになったところへアリミノのアクアが熊へあたった。

「ガアッ」と熊はさけび今度はアリミノめがけ突進してきた。

セージも逃げずに魔法を唱えた「ファイア」

アリミノが「きゃあ」と声をあげ熊が大きく立ち上がり攻撃をしか

けようとした時だった

セージのファイアが今度は熊へ直撃し、熊は横のめりに倒れた。

「ガアア」熊はそれでも起き上がり再び戦おうとした時だった。

「ファイア」とセージの声がし熊の左目目掛け殴りかかった。

「グアアア」と熊は叫ぶと森の奥へ逃げて行った。

アリミノはペタンと地面の上に座り込んだ。

ふっと目の前にシードがあらわれ、「大丈夫？アリミノ」と駆け寄ってきた。

「ふ、二人ともありがと。結局私が助けられちゃったね。」

「なにいつてんだよ。3人で追い払ったんだよ。」

そういつて3人で再び前に進み森の出口まであと少しの所でもう暗くなってきた。

そしてこれまでにない寒気を3人が同時に感じた。

「ドルルルル・・・」

「・・・ア・アリミノ？」

「な・・・なに？」

「これ・・・なんの声かな」

「た・多分なんだけど・・・ウルフ・・・かな・・・違う方がいいけど・・・。」

全員一斉に背中を合わせ周囲へ杖を向けた。といってもシードは素手だった。

「ドルルル・・・」ガサガサと6匹のウルフがシード達を囲むように出て来た。

「これは・・・まずいよ。1対1でもいい勝負なのに・・・」アリミノが叫んだときだった。

「ガルウツ」と吠えながら一匹のウルフが飛びかかってきた。

「まかせて」とシードは言つと「ファイア」と唱え右手を火球で覆いウルフ目掛け

カウンター気味に殴った。殴られたウルフはいったん引き群れにも

どった。

「ちよつと・・・」とアリミノはシードの魔法の使い方にビックリしながらも

周囲のウルフを警戒した。

「ドルルル」と吠えながら6匹のウルフは次第に距離を狭めて来た。
「モーーーくるなーー」とセージは叫びながら「ファイア」と唱えた。

そのセージの火球をよけるように6匹は飛びかかってきた。

「きゃあ」とアリミノが声を出した時だった。

「ガッ、ザッ、ドシュッ」とすさまじい音がし「ギャン、ギャウ」とウルフの叫び声が

聞こえたかと思うと3匹のウルフは倒され残りのウルフ達はシード達の前から

逃げ出して行った。

「おー、あぶなかったな。大丈夫だったか？」戦士と思われる人が立っていた。

「あ、ありがとうございます。僕達今日中にマムルークへ行こうとしてたんですが

ウルフにおそわれちゃって。」シードが答えると

「おー、マムルークなら私の住んでいる街だよ。この森はもうすぐ抜けられる。」

「森を抜ければすぐ先に街があるよ。よかったら家によるかい？」と声をかけられた。

シード達3人は顔を見合わせにつこりわらって「はい。おじゃまします」と答えた。

「ははは、元気いいな。私の名はムスタだ。君達のお父さんと同じくらいかな？」

「うちにも君達くらいの子供が一人いてな。」

そういいながらムスタは街まで一緒にいつてくれた。

第4章：オウガ

翌朝、おいしそうな匂いにさそわれシードは目が覚めた。

「あれ？ここは・・・あ、そうだムスタさん家に泊めてもらったんだった」

隣のベッドではセージとアリミノがまだ寝ていた。

そっとシードは起き上がり1階へ降りていった。

「おはよう。よく眠れたかね？」ムスタさんだった。

「おはおうございます。はい。昨日は疲れちゃって・・・本当にありがとうございます。」

「ははは。3人とも家につくと夕飯も食べずにすぐ眠っちゃうからビックリしたよ。」

「あら？おはよう。えっとシード君ね。私はカシス。ムスタの妻です。よろしくね。」

テーブルに料理を並べながらムスタさんの奥さんが話しかけてきた。
「昨日は突然おじゃまして、すみませんでした。」そうシードが話していると

「おはようございまーす」2階からセージとアリミノが降りてきた。
「昨日はあぶないところを助けてもらって本当にありがとうございました。」

「ははは、無事でなによりだよ。今後は戦士も仲間に入れて動くんだよ。」

「じゃ、さっそくご飯にしましょうかね。」

「はーい。いただきます」

「あれ？そいえばムスタさん家息子さんがいらっしやるんじゃ？」
アリミノがたずねると

「おお、いるんだが来週学校の卒業試験でね。今はパートナー探し

カモナーク
に君達の街まで

いつているはずだよ。

いいパートナーが見つければいいが・・・」ムスタさんが少し心配そうに言った。

「パートナー？卒業試験つてこの街は戦士系の方達がおおいから戦士同士の戦いじゃ

ないんですか？」アリミノが不思議そうにたずねた。

「この街の学校の卒業試験は3対3の対戦なんだよ。組み合わせは自由なのでやっぱり

魔法使いも必須になってくるわけなんだ。」

「へー、私は仲間を探しにこの街にきたので・・・じゃあ、今なら見つけやすいですね。」

「ああ、3人とも卒業の証である指輪をしているのだから酒場に行けば探している人達を

見つけられると思うよ。」

「ただ、向うも卒業がかかってるから人選しているみたいだからね。今年の卒業している

君達の学校の生徒名なんかはもう知られているよ。」

「通常は卒業後1年くらいの中に仲間が出来上がるから、今の時期に仲間の魔法使いを

見つけるには同時期に卒業した人達になるからね。」

「まあ家の息子は噂より見てから決めるといつて飛び出していったがな。」

「息子さんの名前なんていうんですか？」シードが興味を少し持つて聞いてみた。

「ああ、オウガという名前だから・・・まあ、気があうようだったら考えてくれ。」

食事も終わり後片付けをしていると来客がきた。

「シード君、ムスムリさんが着てくれたよ」

実はムスタさんが仕事の荷物の渡し先へ連絡を取っていてくれた。

シードとセージは無事仕事を終わらせる事ができた。

3人はムスタとカシスへあらためて礼をいい家を出ようとしていた。

「ああ、シード君達はこれからどうするんだい？」

アリミノがまず答えた。

「私はこれから酒場にいつて早速仲間探しをしてみます」

「僕は一度報告に街まで帰る予定です」

「おお、それじゃ街まで一緒にいかないか？昨日みたいな敵が出てきても私がガードできるから」

「うわあ、ありがとうございます。すごく助かります。」

「いや、ちよつと馬鹿息子が心配になつてね。」

シード達はアリミノと別れると早速街へ戻った。

「ムスタさんのおかげで安心してここまで戻れました。ありがとうございます。」

「いやいやこちらこそ。・・・まあ、うちの馬鹿息子がもしも依頼してきたら考慮してくれ。」

「あはは、でもそれは無いと思いますよ。僕の魔法は飛ばないから。」

「そういうとシードとセージは酒場へ報告に走って入っていった。」

「飛ばない魔法か・・・フェイクみたいだな。」そうムスタはつぶやきながら酒場へ入っていった。

シードとアリミノは早速仕事の完了を報告すると報酬である契約書をもらった。

「うわあ、これで新しい魔法覚えられるんだ。」セージがうれしそうに言った。

「セージはどれにする？うーん。わかんないから先生に聞いてみる。」

「あ、僕もそうしょつと。」2人はそういうと学校へ行った。

「サフラン先生く」シードとセージがサフラン先生に声をかけた。
「あら2人とも久しぶりね。どうしたの？」

「今ね初めて仕事して魔法の契約書もらっただけどどれ覚えようかと思って。」

「ああ、そうねー火・水・土の1v2のどれかならセージは火がいんじゃないかな。」

「あなたの魔法の威力は火属性が強いから向いていると思うよ。その後他のも覚えていくと

いいよ。但し、覚えられる魔法の数は個人個人で限界があるからまずは必要なのを覚えてね」

「はい。じゃ、火の1v2で契約つと……。呪文を唱えると・・・セージの体が光った。」

「これファイアと少しだけ呪文がちがうね。覚えるの簡単でいい」
セージは違う点で喜んでいた。

「先生、僕はどれがいいのかな？」

「そうねー、あ、そうそう、アニス校長がシード君を探していたので行って聞いてみるといいよ」

「はい。じゃあそうしてみます。」

「じゃあセージ僕アニス校長先生のところいってみるね。」

「うん。シードまた仕事一緒しようね」セージはそういうと学校を出て行った。

シードは早速アニス校長を訪ねた。

「やあ、シード帰ってきたね。探してたんだよ。これを君に渡さないと思うてね。」

渡された物は3枚の魔法の契約書だった。

「校長先生これ……。」

「昨日君のお父さんと話す機会があつてね。卒業したので渡してかまわないといわれてね。」

「普通の魔法使いでは手に入れられない魔法の契約書だから・・・」

「そ、そんな大切なもの・・・お父さんが僕につて？」

アニス校長は優しく微笑みながらうなずいた。

「そ・そうだ校長先生僕ね、今日仕事はじめてしてきて火・水・土の1v2のどれかの

契約書をもらえるんだけどどれがいいかと思って・・・」

「ああ、簡単にいうね。魔法使いといってもみんなそれぞれ属性がある。

例えば私は水の属性が強い、かといって火が弱いわけでもないが火よりも水が強く使える

その逆もまたある。魔法使いの中で火・水・土・そして光の属性が主にある。

ただ、光の属性の魔法使いはこの街には残念だが居ない。他国にはいるんだけどね。

君の属性はの中で土の属性になる。主には状態変化形魔法になる。

「僕、土なんですネ。それが原因で魔法がとばないんですか？」

「属性が土でも普通は魔法は飛ばせるんだが、君の場合お父さん同様属性が強すぎるんだよ」

「ただこれは悪い事じゃないんだ。それをどう使うかは今後学ぶといいよ。」

「さて質問の件だがなやまずにここは土の1v2でいいよ。ちなみに土の1v1は、君は既に

覚えているよ。卒業試験で使ってたトランスという魔法がそうだよ。

「土の注意点は、1v1の契約書を手に入れるのが難しい為需要が殆ど無い。

その為、1v3以降の契約書は殆ど出回っていない。

更に・・・契約書を手に入れる方法が難しすぎてね。」

「さて、この君に今日渡した契約書についての説明だが土の1v3・4・5の契約書になる」

「え・・・、それってさつき殆ど出回ってないって」

「そうだ。これを使える魔法使いは殆ど居ない。」

「魔法名は1v3フェイクミラー1v4がアブソル1v5がインパクトになる」

「フェイクミラーは相手からこちらへの視界を不良にし命中率を下げる事ができる」

「アブソルは相手へ与えたダメージ分の体力を吸収することができ
る」

「インパクトは相手の体力を全てダメージとして与えられる」

「ちなみに1v2はハンドという魔法で相手を捕まえる魔法だ。ただしダメージは与えられない。」

「さて、これらの契約書は持ち歩かれてもこまるのでね。今すぐ契約をすませておきなさい。」

「え、でもサフラン先生が魔法の数のことってたけど・・・。」

「君の属性魔法だから優先的に覚えるべき魔法だよ。安心しなさい。」

「シードは早速契約書をもち呪文を唱えた。

シードの体が光り、土属性の魔法を覚えた。

「これからの君の成長をねがっているよ。」

「アニス校長先生どうもありがとうございます。」

シードはそういつとキャラウェイに会いに酒場へ向かった。

酒場に入るとキャラウェイがムスタさんと親しげに話しているのが見えた。

あれ？ムスタさんと知り合いなのかな？そう不思議におもっていると「あら？シードこつちおいで」とキャラウェイが気づき声をかけてくれた。

「キャラウェイさんムスタさんとお知り合いなんですか？」

「え？シードこそムスタ知ってるのかい？」

シードはこれまでの事をキャラウェイに話した。

「ははは、そうかいそうかい。ムスタはフェイクの仲間だよ。」

「えー！お父さんの？。あー！そういえば水晶で見た中に・・・」

「いやいや、こつちもびつくりだよ。魔法が飛ばないっていったからフェイクみたいな子だなと

思ってたなら、フェイクの子だったなんてな。」

「お、きたきた。おい、オウガこつちこい。」

「なんだよ親父。」

「これが家の息子でオウガだ。ほらオウガちゃんと挨拶しな。」

「オウガだ。よ、よろしくな。」乱暴で不器用そうなタイプに見えた。

「シードです。よろしく。」シードはにっこり笑った。

「ところでお前仲間になつてくれる魔法使いは見つかったのか？」

「それが親父まだ見つかんなくてよー！。このままじゃ来週の試験3対1になっちゃうよ。」

「さすがに俺様でも少しだけそれは難しい・・・。」自信家のようにだった・・・。

「じゃあ、このシードにお願いすればいい。」キャラウェイがシー

ドの頭をぼんぽんと

たたきながら言った。

「シード・・・シード・・・いや、今年の有力魔法使い名簿にその名はなかった。」

ボカッつとムスタがオウガを叩いた。

「お前自分の目でみて判断するとかいつときながら噂重視かよ。」ムスタさんが怒っていた。

「あ、でも確かにそうですね。僕の魔法とばないから。」シードがフォローを入れた。

「そだセージの魔法強力だし今日1v2の魔法も覚えたからいいんじゃない？」

「おお、じゃあお前とセットで頼めるかな。3人のほうが数は有利だから」

ボカツ・・・ムスタさんにまた叩かれていた。

「だ、大丈夫ですよ。じゃあセージさそって試験前日までにムスタさん家にいきますね。」

「おお、シード君うちの馬鹿息子がむちゃくちゃいってすまないがよろしく頼むよ。」

来週シードとセージは一緒にオウガの卒業試験を手伝うことになった。

第5章：卒業試験

翌週の試験前日シードとセージはオウガの卒業試験を手伝う為ムスタの家へ来ていた。

「オウガ、この街の試験は一発で卒業するのはかなり難しい。但し、お前は俺の子だ

絶対卒業しろ。だめだったとしても戦士として恥ずかしい負け方はするな。」

ムスタが真剣な表情でオウガへ語った。

「お、おう。俺は絶対負けない。心配するなよ。俺は絶対親父みたいな有名な戦士になるんだ。」

「・・・」2人の真面目な語らいに部屋の中はしばらく重苦しい空気につつまれた。

「あの、明日の試験ってどうやってたら合格なんですか？」セージが気軽に聞いてみた。

「あ、ああ、簡単に言っとトーナメント戦で、勝ち抜きで上がっていけば合格しやすい。」

初戦でまけるとまず合格は難しい」オウガは前から調べていたようだった。

「何勝以上みたいになってるの？」

「いや・・・審判員の先生達がそれぞれの戦いをみて合格者は決められるんだ。」

「だから初戦でまけると合格は難しいといったが、初戦互角で戦って勝ち残った相手が

トーナメント優勝するようなら、おそらく初戦敗退でも合格できるんだ」

「ただ、負けたほうはすぐ治療してもらえるんだけど、勝ち上がり組みは負けるまで自分達で

治療しないといけないんだ。」

「え・・・回復系の人がいないからだめじゃ・・・」シードとセージが声をそろえて言った。

すると、オウガが自信満々な笑みを浮かべ話した。

「いいか？回復系を一人いれると普通残りの2人は必ず戦士と魔法使いになる。」

戦士と魔法使い2人のパーティーにはその組み合わせじゃまず勝てないんだ。」

「なるほど・・・」シードは意味をすぐに納得した。

ムスタはそんなシードの機転の速さに昔のフェイクを見ているような感じがした。

「ただ、確かに消耗戦の様相になってくるのでトーナメント優勝は実力だけじゃまず難しい。」

「負ける戦いの時も負け方が悪いと今まで勝ち上がっていても卒業が微妙になる。」

「戦士の卒業試験って大変なんだ」セージが話すと

「前衛職がなさけなかったら後衛の君達の職種はたまらないだろ。」

戦士は負けても前を向いて

倒れるべきだ。」ムスタがさっさと言い切った。

「うおおお、俺は絶対やるぞー」オウガは気合入りまくりだった。

ボカツとムスタがオウガの頭をたたき、「気合は必要だが戦闘中は冷静な方が絶対に勝つ。」

経験者の語る言葉はカッコいいと思った。

「うう、解ってるよ親父。俺だって色々考えてるんだ。」

そこでだ、シードとセージにこの資料を渡す。」

ペラ1枚の紙だった。

「なにこれ」セージがその紙をとり読んだ。

表題「今年度魔法使い卒業生リスト」

1位フェンネル A級
2位アスペル A級
3位テルペン A級
5位カーネル A級

・
・
・
20位アリミノ C級

・
28位セージ C級

・
29位タデ D級
30位シード D級

「うわ、僕ドベだ。」シードが話しているとボカツとオウガがムスタに叩かれていた。

「あれ？でもこれなんか辺ね。シードは3位のテルペンに勝ってるのに。」

「なにー。お前実はすごいのか？。おお少し光が見えてきた。」

「・・・ところでオウガはどうなのよ？戦士リスト見せてよ。」セージが手をだすと

「馬鹿にするな。俺様は最強だ。ふはははは、お前達明日は大船にのった気でいる。」

そういうとオウガは部屋へ逃げるように入ってしまった。

「まあ、あんな息子だが明日はよろしく頼むよ。致命傷を受けても死ぬ事はまずないが

危ないと思ったら棄権してかまわないからね。」ムスタはシードたちによさしく語った。

「僕達もどこまでできるかわかりませんががんばります。」シードとセージはそう言つと

明日に備え部屋に入った。

翌朝、街中が今年の卒業試験の開催で盛り上がっていた。

試験会場の中でオウガをリーダーとしてトーナメント表ののを待っていた。

「あ、セージ」アリミノが声をかけてきた。

「アリミノ」セージがぶんぶん手をふっているとアリミノの横から強そうな戦士が

笑っているのが見えた。

「やあオウガ。お前のパーティー楽しそうだな。今年はあきらめたのか？」と聞いてきた。

「ため、カイト俺の仲間を馬鹿にするな。」今にも飛び掛りそうに激興したオウガだったが

昨日のムスタの言葉「冷静」を思い出したのか「ふーっ」と息を吐き

「まあ、どう思おうが勝手だが、お互い今日はがんばろうぜ」といい、カイトと握手をしていた。

どうやら仲はいいようだった。

握手を放した時オウガの手のひらに「冷静」と書かれていたのが見えてしまった・・・。

「冷静って手に書いてる・・・。」セージがぼそつとつぶやいた。

シードは必死に笑いをこらえた。

「シードとセージも今日来てたんだね」アリミノが言いながら2人の様相を見ていた。

「ちよつとセージその衣装・・・てか、シードの衣装もなんなのよ」2人はにこにこ笑っていた。

「へへへ、衣装は2人とも親のお古だよ」ちよつとみんなと違っていていしょー」

他の魔法使い達はみんな今風の衣装を羽織っていた為、逆に2人は目立っていた。

特にシードは見習い魔法が使った衣装と同じ形状で色が黒であった為

更に目立っていた。

「では、今からトーナメント表を張ります。1戦目のパーティー会場へ入りなさい。」

卒業試験をスタートします。」

オウガがトーナメント表を見てきて走って戻ってきた。

「俺達は最終組だった。しばらく休んでおこう。」そういうと会場側の広場へ3人で向かった。

「ドォーン・・・ドォーン・・・」会場内からすごい音が聞こえてきた。

「今日は俺の為にきてくれてありがとな。昨日は色々いっちゃったがほんとに感謝してる

絶対後衛へ相手の戦士を行かせたりしないから安心してくれ。」オウガが珍しく真面目に話した。

「大丈夫だよ。戦士が抜けてきてもシードなら消えるから。」セージがいうと

「いや。消えててもその場の周囲に居るなら魔法と違って戦士なら攻撃できるんだ。

振り回してたら当たるから・・・。」オウガがつぶやくと

「あ、僕魔法結構覚えたから消えなくても近距離戦ならなんとかできますよ。」とシードは言った。

「言葉はうれしいが、まあ俺に任せろ。2人はとにかく相手と互角に戦ってくれ」オウガの目に闘志がみなぎっているのがわかった。

1時間ほどたっただろうか。対戦の呼び出しがかかった。

「おっしゃー。いくぜー」オウガが気合を入れた。

シードとセージは立ち上がりオウガの後をついていった。

会場に入ると対戦相手が既に準備していた。

「では準備終わり次第各パーティーは陣形をとってください。」シードは衣装と同じ黒色のつばが異常に広い帽子をかぶった。

「おま・・それじゃみえ・・。」オウガがつつこもうとしたが相手に動揺をさとられまいと

平静を装った。オウガは相手の武器が剣なのを確認すると同じく剣を選んだ。

陣形はどちらも同じで戦士同士が前衛でぶつかり後衛は2人横にならんだ。

「あ、あの魔法使い達とはなりのクラスの2人だね。」

「強いのかな？」シードが聞くと

「うーん。私達よりランクは上なのは間違いないよ。」とセージが答えた時

「では、両パーティー対戦開始」と対戦の合図が告げられた。

「だああああ」開始と同時にオウガと相手の戦士との直接攻撃が始まった。

「ガキン、ガキン、激しいつばぜりあいの音が響いた」

見た目でパワースピード共オウガが上であるのがしろうと目にわかった。

相手魔法使い2人は杖を構えると同時にファイアと唱え、シードとセージそれぞれへ向かって

魔法を放った。

「ゴオツ」とうなりをあげて進む火球に向かって「ファイア」とセージは同じく

火球を唱えた。「ゴパツ」と音を上げ火球同士はぶつかり消滅した。

シードはいつものように杖を持たず「ファイア」と唱えると右手に火球をつくり

相手の火球を殴るようにして消滅させた。

後衛同士は均衡をくずさない為お互いファイアを打ち合う形になっていた。

そして前衛の戦い……。オウガが激しく押していた。

「ガキン・ガキンガガ……」つばぜり合いがさらに激しくなり「うおりゃー」というオウガの声とともに「ガシャー」と相手の武器が飛ばされる

音がした。「ぐうう」と相手戦士が呻き声をあげその場に膝をついた。

「ドスッ」とためらうこともなくオウガがとどめをさした。

「あ……」と相手後衛の2人は声をあげオウガへ向かって魔法を唱え始めた。

オウガは素早く反応し相手魔法使いへ向かって進みだした。

「1・2発くらっても俺は倒れないぜ……」とオウガはいいながら突進し相手魔法使いまで

2間程の距離になった時だった。

「ゴオオッ」と通常のファイアより勢いのある火球がオウガの頭上を越え相手魔法使いの

一人に命中した。「ぐうわあっ」と声をあげ一人魔法使いが倒れるとあっけなくもう一人の

魔法使いは杖をおろし両手をあげた。

「はい。それまで。」審判のとめる声に反応しオウガの剣が止まった。

相手魔法使いの首筋のすぐそばまで剣先がせまっていた……。

「勝った方は次に備えてください。」審判の横で先ほど倒された戦士が回復魔法を受けていた。

「オウガってほんとにつよいんだね。セージの新しい魔法もすごいね。」

シードが感心するように言った。

「おっしゃー。まず一戦目クリアだ。」オウガはそう言うとき先ほどの場所に向かった。

「ありがとな。これでなみにのれそうだ。このまま優勝めざすぞー」

「そいえば、優勝したらどうなるの？」セージがかかるく聞いてみた。
「優勝したら今年の優勝者の証の指輪もらえるんだ。毎年1組だけもらえる荣誉だ。」

「へーその指輪ってすごいのか？」

「う・・そりゃーかつこいいだろ？」オウガが戸惑っていた。

「うん。みんなでがんばって優勝めざそう。」シードがとりあえずまとめた。

でこぼこながらいいパーティーになりそうな感じがシードにした。

第6章：卒業試験2

会場から2回戦開始の案内が聞こえてきた。

「よし。次もやってやるぜー」オウガは気合入りまくりで立ち上がった。

セージとシードはオウガの後をとことこと付いて行っただけで会場へ入った。

「では準備出来次第開始します。」

3人は前回と同じ陣形で前衛をオウガとしセージとシードは後衛にまわった。

「あ、相手2人だよ」セージがつぶやいた。

よくみると相手は前衛が戦士2人で後衛がいない陣形だった。

1回戦で負傷の為にトーナメント表実は書いてあったが誰も確認していたなかった・・・。

一人は両手斧もう一人は盾と剣をもっていた。

オウガは戦士2人の状況に動揺しているのが見て取れたが時折手のひらを見つめながら

つぶつと独り言をつぶやき、盾と剣を装備した。

「うわ。これだとどっちかの戦士私たちのほうにくるね。」セージが不安そうにいうと

「セージはこの場所でオウガと対戦する戦士へ攻撃してね。もう一人は僕が止めてみる。」

そういうとシードはオウガより少し下がってはいるが前にでた。

「おい。あぶねーぞ。」オウガが小さい声でシードへ話しかけた。

「うん。でも多分これが一番勝率が上がるよ。」そういうとシードはにっこり笑い

魔法使いとは思えない拳闘士のようなファイティングポーズをとった。

みている会場の人たちが少しざわついていた・・・。

「では、準備できましたね。」「それでは・・・開始」審判の掛け声とともに一斉に

相手戦士2人が突進してきた。

セージとシードはそれぞれ呪文を唱え始めた。

オウガの方へ両手斧の戦士が突っ込んでいった。

「ガキン、ガキン」と相手戦士は斧でオウガへ攻撃をかけたがオウガは冷静に盾で防いだ。

オウガの横をもう一人の戦士がとおりぬけシードめがけて突っ込んできた。

「まずはお前からだ」と戦士は言いながら剣を振りかぶった。

シードは相手が立ち止まったのにあわせ少しだけバックステップすると右手を前後させて

「ハンド」と呪文を唱えた。地面から突然巨大な岩状の手がでてきた。

「うわっ」と相手戦士が動揺し声を出した時には「ガシッ」と相手戦士を捕まえていた。

「くそつくそつ」と相手戦士はわめきながら巨大な手から逃れようともがいていた。

シードが更に安全を確保するためバックステップをしたとき丁度セージの放った火球が

うなりをあげてオウガと戦っている戦士へ飛んでいった。

「ガキン、ガキン」と相手戦士は斧で攻勢にでていたが火急が飛んできたのを見ると

斧でとつさに受けの体勢をとった。

斧で火球を防ぐためにできたスキをオウガは見逃さなかった。

「だああああ」オウガは叫びながら剣を素早く横一閃振りぬいた。

「ズバッ」と相手の腹を切ると「ぐうう」と相手は呻き力なくうず

くまった。

「ドスッ」とオウガはためらうことなくとどめをさすとともに後ろを振り向きシールドをさがした。

「うわっ・・・なんだこれ・・・」巨大な手に相手戦士が捕まっているのをみて

オウガがあっけにとられていると。

「オウガ、この魔法もう解けちゃうから・・・いそいで」とシールドは少しあせりながら言い

更にバックステップした。

「おう、まかせろ」とオウガはシールドが無事で安心しながらも急いで相手戦士の側へいった。

そのときだった「フッ」と巨大な手が崩れるようになくなった。

相手戦士はすぐに突進しようと構えたが、オウガが視界に入りすぐに構えを解き降参した。

1対3では勝ち目がないと判断したのだった。

「よっしゃー」オウガの大きな声が会場中にひびいた。

「それまで」勝ったパーティーは会場奥の控え室で待機してください。

「おっ、パーティーへったから控え室で待機になったぞ。」

3人は一人も負傷することなく順調に勝ち上がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6294h/>

がっこがっこ

2010年12月4日04時53分発行